

## 心と身体 の健康指南

——『艶道日夜女宝記』対『医道日用重宝記』

アンドリユー・ガーストル

春画や春画本（春本、好色本、艶本「えんぼん・えほん」、笑い絵、笑い本、枕絵など、様々呼びならわされるが）は従来、女性のためのものではないとか、性交の指南書ではないとか言われてきた。しかしながら月岡雪鼎（一七二六—一七八六）の作品の多くは、この見方をくつがえすものである。雪鼎の画作になると考えられる『艶道日夜女宝記』は、大衆向けの医学書『医道日用重宝記』をパロディにした春本で、ユーモアをもって性生活のあれこれについての細部にわたる解説・手引きを記した書であり、その内容は男性・女性のどちらにも向けられている。本書はユーモアとパロディという形をとってはいるが、

その目指すところは明快で、実用本位のものである。すなわち、精神的・肉体的な健康にとつてセックスがいかに重要であるかを理解すること、そして性に関する知識は男女ともに欠くことのできないものであると理解すること、その必要性が説かれているのである。本書にはさまざまな組合せの性交が列挙されており、また、性のテクニクや閨中道具に関するアドバイスや、恋の歌や恋文をしたためるための例文、男性が意中の女性の心中を探るためにはどのようにアプローチす

べきかといったことまで、教えてくれるのである。本書は墨摺一冊の横本（一五・七×一〇・五cm、『医道日用重宝記』と同じサイズ）で、着物の袖や胸元に入れて持ち運ぶのに便利な大きさであったと推測される。日本における性の歴史を考える上の史料として、この小さな一冊の本の持つ意義は大変深いのである。

雪鼎の手になる春本『女大楽宝開』（一七五〇年代中頃）<sup>①</sup>や『女令川おへし文』（二七六八年頃）<sup>②</sup>と同様に、『艶道日夜女宝記』は原書『医道日用重宝記』の文章をもじったり、原書の挿絵をもとにして性交の場面を描いたりしながらパロディ化している。『医道日用重宝記』は一六〇丁を越える大部でありながら挿絵の数は限られている。

『艶道日夜女宝記』は、それに比べるとずっと数多くの挿絵を入れ、原書の文章を直接パロディにしているのは一部のみではあるが、各章の題のほとんどは原書のそれをふまえており、他の雪鼎の春本と同じく、パロディの細かさに対する努力に感心させられる。さらに雪鼎の別の春本『婚礼秘事袋』<sup>③</sup>には、『女大楽宝開』『女令川おへし文』と並んで『艶道日夜女宝記』も、婚礼道具に欠かせない春本として挙げられ

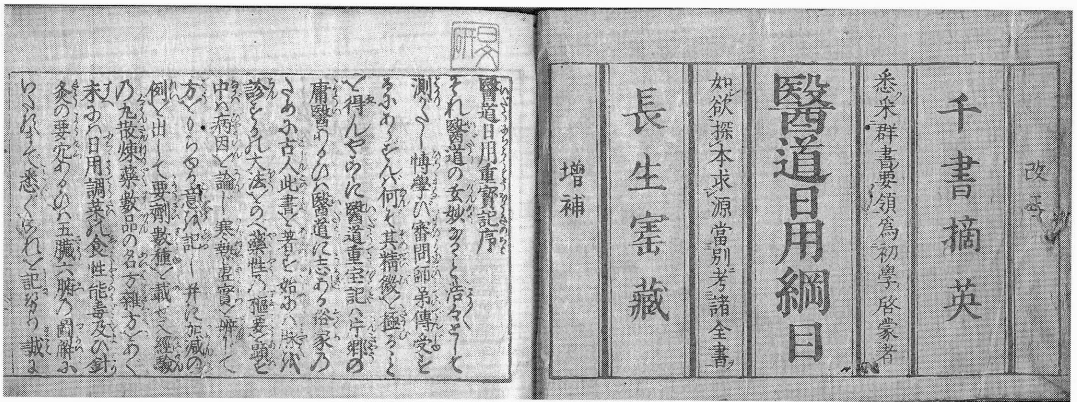


図1 『医道日用重宝記』

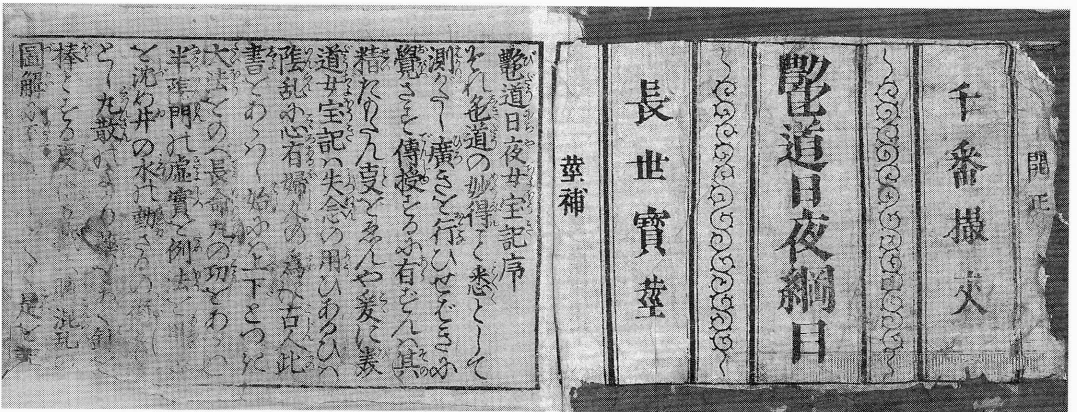


図2 『艶道日夜女宝記』

ている。享保の改革で好色本の禁令が出た一七二二年以降の春本は、基本的に刊記（作者、版元とも）を伴わないので、『艶道日夜女宝記』がいつ出版されたのか正確に知ることはできないが、今日ではおよそ一七六〇年代中頃以降に位置づけるのが通例である。『艶道日夜女宝記』は、京都の吉田半兵衛による春本にならつていと考えられる。吉田半兵衛の最も有名な春本は『好色訓蒙図彙』（一六八六年）で、一六六六年出版の『訓蒙図彙』<sup>1)</sup>という、いわば絵入り百科事典の形式を使ったものである。雪鼎がこの伝統に従って、性についての習わしやテクニクに関する有用な手引書を作ろうとしたことは明らかである。これら上方の春本のうちに、江戸で最も数多くの春本を手がけた溪斎英泉（一七九〇—一八四八）などに影響を与えたのであろう。

『医道日用重宝記』は、一六九二年に大坂で初版されて以来、江戸時代から明治にかけてのベストセラーとなった書である。一七〇年の増補第二版の序文には「浪華 芳菊堂本郷正豊」の署名がある。「正豊」という名は『艶道日夜女宝記』の序文にも見出されるが、その関係は不明である。一七一〇年版はかなりの量の文章を増補しており、これが後の改訂版の基礎となっている。一七一〇年以降、一七一八・一七二三・一七三三・一七四七・一七六二・一七八〇・一八一八・一八四五・一八四九・一八七三・および刊記のない明治版まで版を重ねており、「重宝記」ジャンルの中では最も人気の書であった<sup>2)</sup>。本書「近世艶本資料集成」に掲載した『医道日用重宝記』は、国際日本文化研究センター（日文化研）所蔵の一七四七年版の一部である。雪鼎はおそらく一七六二

年版（その内容はほぼ一七四七年版に同じ）に則ってパロディ春本をつくったと思われる。江戸時代における医学書の多くが漢文で記されていたのに対し、『医道日用重宝記』はほとんどの漢字にルビがふつてあり、読みやすい和文体で記述されているため、長期間にわたって一般の支持を得続けたのであろう。

太平書屋から出版された『艶道日夜女宝記』の複製本（出版年不明）には、解題ならびに後摺本に見られる異版挿絵、『医道日用重宝記』の一部影印などが収録された小冊子が付されている。異版挿絵の存在は、後摺本のために新たな版木が彫り起こされたことを示しており、つまり『艶道日夜女宝記』もまた人気を博した書であったことを物語って



図3 『医道日用重宝記』

いる。複製本には、ただし、『艶道日夜女宝記』の最後の二章「はじめ遣す文」「はじめ遣す恋のうたづくし」は含まれていない。複製本は日文研本と同じ版と見受けられる。ここに収めた翻刻（早川聞多氏）ならびに翻訳にあたっては、日文研本と複製本および個人蔵本を比較対照し底本とした。

では『医道日用重宝記』と『艶道日夜女宝記』から、以下に数カ所を取り上げて比較をしてみること、『艶道日夜女宝記』のパロディの機知性を具体的に検討してみたい。

最初の見返と序文を見れば、読者はその内容に察しがつくであろう。すなわち題や章立てを記す形式は原書と同じに見せながらも、もじりの言葉遊びによって、医学用語を性的な意味の語へと変換させているのである（図1『医道』、図2『艶道』）。

『医道日用重宝記』の第一章「寿保按摩法」は、次のように始まる。

夫按摩ハ人虚損して血氣のめぐらざるゆへに病をなすなり。人常に手足身体を動揺するときハ食物消しやすく血氣めぐり病生ずることなし。

そして続けて、正しい按摩が健康を保つために血行を良くする助けとなることを説明し、自分で行う「自己按摩」の仕方を図解する（図3『医道』）。

一方の『艶道日夜女宝記』でもまた、第一章は自分で行う按摩について、しかしここでは「自行安味法」である。「按摩」は「安味」と漢字を変えても同じく「あんま」と読ませているが、その意味は自慰の



図4 『艶道日夜女宝記』

ことである。文章は原文をパロディにして以下のように述べる。

○自行安味法  
じかうあんまほう

△夫安味は男女共に虚損すと云ども、血気めぐらざればかへつて病をなす也。人常に五臓の血気どうようすれば血よくめぐるゆへに、じん水くさる事なし。陰乱女の曰、自安味はよく心をなぐさめ血気をめぐらすと云へば、貞心をもやぶらずはづみし開中をゆる(緩)かになすと、張がたを調和して其なやみを治す。しかれ共自身交合の思ひをなせばいだき付く便なく専手に力を極る故に、終には肩のつかへを求、誠のあんまけんべき取りをたのみ、

又開あとりをこしらゆるもおかし。

女性の言葉の引用という形で自慰の話を入れる手法が面白い。原書の挿絵では、中国人ふうの男性が「自己按摩」を行うのに対し、そのパロディでは女性が自慰をする術を図解している(図4『艶道』)。女性が自慰を行う絵姿を並べ、それを行う術を明快に記した文章からは、性的な悦楽が女性にとって非常に大切なものであるという強い主張を読みとることができるだろう。

最初の例からは、この当時の日本では処女信仰がそれほど広くゆきわたっていたわけではないことが見てとれる。ただし、遊女や芸者の最初の性交、すなわち「水揚」の相手となることが、花柳界の粹者にとっては手柄であったことを付言しておこう。

初心(時)の女はまづ枕絵を求めて心をうるほし、このもしく気ざしたるときくちり杯(じ)にてそろく道(道)をあくれば、しぜん(自然)と其気(き)いたり(新)てにぬ枕(新)にくつうなし。(苦痛)

片手をうしろへつ(く)時は片(足)あしを片手にてか(腰)へ、こしをかゞめるやうにうつむきて図のごとくおこなふべし。

結婚後の初夜において、女性が全くの処女であることに対する期待もまた、それほど強くなかったようである。雪鼎の『婚礼秘事袋』では、初夜に臨む女性への教えとして、処女の女性のみを対象に何をどうすべきかということだけではなく、既に経験のある女性に対しても

助言を施す。

嫁床に入て、あまりべたつきたるハわろし。またすんすんとしたるも宜しからず。又床なれたる女なりとも、うかめしていははなはだ悪し。ただおもはゆく初心なるていよろしかるべし。〔婚礼秘事袋〕<sup>(6)</sup>

『艶道日夜重宝記』には『医道日用重宝記』と直接関わりのない恋愛指南の章「本色仕之必得」があり、女性がどのように振舞うべきか——とりわけ男性に対して——について記される。そこでは、品のよさ、感受性の高さ、優しさ、が女性に欠かせない特性として挙げられている。

艶は女性に寄所なれば敬ずんばあるべからず。我容美なるまゝに愛せざることなかれ。人ほれて文など付る時するどく返答すべからず。たとへ心に染ざる男なり共、品よく先の心立ざる如にへんじして向ふを立るを婦人の常とすべし。又わかき男の傍へよるとも、かならずたはぶれ詞を出すことなかれ。かへつて色愛をうしなふ物也。主有ル女は至てつゝしむべし。

また男性が花街でどのように振舞うべきかについての章「楽座作の指南」もある。金で買うセックスは悦びのないものであり、花街は男を畏にはめるキツネの住み処であるという考え方は、西川祐信（一六七—一七五〇）の春本と同様であるが、金のない男に対する遊女

の愛は「又身うすきまぶ<sup>(開去)</sup>（に）心をよするはあぢはひふかし<sup>(深)</sup>。」と讃えられている点は興味深い。しかし花街の粹人に対してはやや批判的である。（「悟道大粹を定事」）

あきない上手にはかさされまじと思はば、狐はらへはちかよるべからず。今も色ざとにて粹とあをぐは、きんぐのつかひ、よくをはなれてゆうげいをならひ、ゆう所の色ごと一めうを多たるなるべし。うはべにはもはや色は好まぬとみせ、そこ心は女をほれさせ、持てくれればするはといふてい也。とかくしゆ行の間には、粹が身をくふとやらにて、くらがりをうかめてあるき、いぬのくそふむにひとしきこと有。又ぜに金いらずに粹と思はれ、ほれるゝかぶき役者は大ふく也。

また、男性が好いた女性にどのようにアプローチしてその心を確かめるべきかというくだりもある。

加減之例 女に文のやりやう  
女に恋を仕かける時、なるかならぬかの、心をためし見るには、まづ初何ニなりとも絵のかきたる物か、又ははやり哥か、道行本のるいにも出して、是見給へとやりて見るべし。其女、はづかしげに取ルか又はうれしげに持かへるかするならば、女に心有ルと知るべし。心なき女は取あげず、又は見ても其まゝに、さしおつか、もどす也。是には少しかけ引有。たとへ女取へず、もどすとも色がましき物にあらねば、はづかしからず。又女に心有と見



図5 『医道日用重宝記』



図6 『艶道日夜女宝記』

雪鼎の春本の多くには、女性に快樂をもたらす技について細かく述べられている。『医道日用重宝記』にある「診脈の法」すなわち脈をみる方法についての箇所は、『艶道日夜女宝記』では「陰みやくの法」と変えられ、両手の図が添えられる。片手には女性器を愛撫するためにどのように指を使うかということが示してある。図中の手首部分には、男性への大切な注意書として「つめをよく取べし」とある。両書の「手」の挿図を比べてみれば、なぜこの注意書が添えられているの

かが解るであろう(図5『医道』、6『艶道』)。

陰(脈)みやくの法

ゑんかう渡すは中指と人さし指のはらにて、玉門の中手なるふくろのやうなる物の其はらをなでる也。又へのこの出いりも此所をこするがよし。いかなるつゝしみふかき女も、よがり出すことうたがひなし。又一義おこなひながらは、さねのうへをおしてやるもよし。たとへば遊女にても、きをゆかするじゆつ也。図を見てよくかんがふべし。

くぢるとも行ふ共、此はらをこするべし。あなのうはつらなり。

くぢる手つき。

つめをよく取べし。

「上品の女を相にてしる事」の章では、理想的美人の身体的特徴とはいかなるものであるかが詳細に記される。雪鼎は春画ばかりでなく美人画でも名声を得ていた画人であるので、女性の美しさを論じるこの段は、美人画の描き方についての当時の生きた史料としても、美術史研究においてすこぶる興味深いものとなる。その他、閨中道具についてや、衆道において若者がどのように臨む



べきかについての章もある。最終章は男女間の恋の歌や恋文のための例文にあてられている。

『艶道日夜女宝記』は性生活全般についてウイットと熱意をもって語られた実践的情報の宝庫である。それゆえ、単に医学書の面白おかしい春本パロディであるという以上に、日本の社会史や性の歴史に関する重要な第一次史料として、学術上広く利用されるべきものである。

(1) 『女大楽宝開・女大宝箱』好豆主人編、太平書屋、一九九八年。

(2) 『女令川おへし文』A・ガーストル著、早川聞多編『近世艶本資料集成

#### IV 月岡雪鼎・1』国際日本文化研究センター、二〇〇七年。

(3) 『婚礼秘事袋』太平主人解説、太平書屋、二〇〇九年。

(4) 『好色訓蒙図彙』は『訓蒙図彙集成』第九卷(大空社、一九九八年)に影印がある。『元禄のエロス』(リチャード・レイン著、画文堂、一九七九年)に影印・翻刻(部分)がある。竹原松鶴「好色訓蒙図彙」『国文学——解釈と鑑賞』第三三卷九号(特集「秘められた文学Ⅲ」)一九六八年七月、には解説と部分的な翻刻がある。全文の翻刻は『好色物草子集』(吉田幸一編、古典文庫、一九六八年)にあり。

(5) 『重宝記資料集成』第三三卷(長友千代治編、臨川書店、二〇〇六年)『医道日用重宝記』四四三―四四七頁、参照。本書には『医道日用重宝記』の影印あり。

(6) 『婚礼秘事袋』太平主人解説、太平書屋、二〇〇九年。

(翻訳 矢野明子)

#### 謝 辞

本書の執筆にあたって、早川聞多先生、ジョン・ブリン氏、石上阿希氏、矢野明子氏、及び赤間亮先生をはじめとする立命館大学アトリサーチセンターの諸氏に心より感謝申し上げます。また「春画プロジェクト」へ援助いただいた、Leverhulme財団(イギリス)、国際交流基金、Prime Ministers Initiative 2 (ブリティッシュ・カウンシル)にも御礼申し上げます。